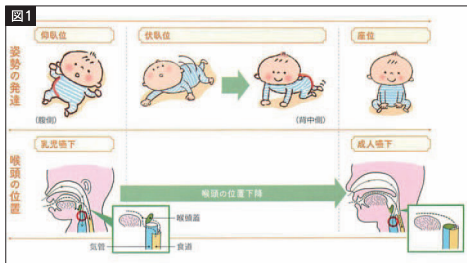


口腔機能発達不全症を退治して、舌や頬、喉の働きが良く、元気で健康なお子様を育てましょう。

お子様が「上手に食べたり飲んだりできない」「口呼吸になっている」「言葉がはっきりしない」と悩んでいませんか？

「噛む」「飲み込む」「食べる」「話す」「呼吸する」といった身体機能は、生まれた後に成長しながら学習することによって完成します(図1)。また、しっかりと噛む、唇を閉じる、舌や頬、喉を正確に運動させて運動させることが、これらの身体機能を発達させるために大切です。最近、子どもが成長するときに、お口の機能の発達が十分でなく、噛む、飲み込む、食べる、話す、呼吸するといった機能の発達



▲新生児はいつも横になっているため、喉が狭くなっている。座るようになって、舌の位置が変わり喉のスペースが広がる。このように、成長と共に姿勢や口腔機能も成熟する(クイント出版歯科衛生士2019年1月号から引用)。

表1

以下の項目にチェックが入り、「噛む」「飲み込む」「食べる」「話す」「呼吸する」ことに問題があれば、口腔機能発達不全症の可能性がります。

- お口を開けたまま食べる
- 食べているときベチャチャと音がする
- あまり噛まないで丸呑みする
- 硬いものを食べない
- なかなか飲み込めず口の中のための
- 水やお茶で流し込む
- よくむせる
- 食べるのが極端に早い、又は遅い
- 言葉が聞き取りにくいことがある
- お口がぼかんと開いていることが多い
- 指しゃぶりがあがる
- おしゃぶりをしている
- 爪をかむくせがある
- 舌を出すくせがある
- 唇をかむくせがある

口腔機能発達不全症には、筋機能訓練や歯列矯正治療が効果的です。

第27弾で述べましたが、猫背や反り返りなどの姿勢を治し、顔面や顎を支える筋肉や舌、唇、頬のトレーニングをします(図2、b)。

に問題がある「口腔機能発達不全症」のお子様が増えてきています(表1)。口腔機能発達不全症は、体の悪い姿勢、運動不足、鼻や喉の病気、指しゃぶりや爪を噛む癖などから発症。また、柔らかいものばかりを食べ、よく噛まずに丸呑みしていることも原因になります。例えば、舌を上と下の前歯に挟む癖がある場合、上下の前歯が離れ、唇が閉じにくくなり、口呼吸になりやすくなるのです。本来は鼻呼吸であるべきですが、口呼吸は喉の炎症や風邪、アレルギーの原因になると考えられています(図2、a)。

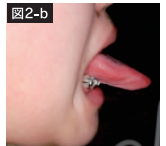
医療法人
くらのうえ丸歯科
院長 長市丸英二先生

長崎大学歯学部大学院卒業後、米国のスタンフォード大学医学部研究員を務める。長崎大学臨床教授、日本歯周病学会認定専門医・指導医、日本口腔インプラント学会インプラント専門医として活動中。

TEL.0942-81-5410
住/島根市東上2丁目187番地 URL www.10shika.jp



▲舌を歯にはさむ癖があり、前歯が開いた状態の9歳のお子様。口を閉じることが難しかった。



▲舌の動きが正常になるトレーニング(筋機能訓練)をしているところ。



▲筋機能訓練と矯正治療で、開いた前歯が閉じた15歳のお子様。口をしっかりと閉じ、鼻呼吸ができた。

※筋機能訓練、歯列矯正治療は保険外診療になることがあります。c)。また、しっかりと噛むためには、虫歯や歯周病の予防も重要。歯並びの治療のために、歯列矯正が必要なこともあります。お子様の「噛む」「飲み込む」「食べる」「話す」「呼吸する」にお悩みがあれば、専門家に相談下さい。